

## 鎌倉幕府の宿曜師

—特に珍誉について—

戸田雄介

〔抄録〕

平安時代中期に成立した宿曜道は、運命の勘申や災厄を祓う祭祀をもって院政期には貴族社会に大きな影響力を持つようになる。

この院政期に活躍した宿曜師は主に珍誉と慶算の二人であった。その後時代は下り、鎌倉時代と呼ばれる時代に入っても、この二人の門流の宿曜師達が活躍するのである。

平安時代、主に宿曜師の活動の場は京の貴族社会であった。し

かし、鎌倉時代には京を離れ鎌倉を拠点に活動する宿曜師が現れてくるのである。

本稿では、この鎌倉へ下った宿曜師珍誉の活動を考えてみたい。

キーワード 九条頼経、鎌倉幕府、宿曜師

はじめに

近年、陰陽道の研究が盛んである。陰陽道については、斎藤励氏の研究が最も古いものであろうが、近年の陰陽道研究の先駆けとなったのは村山修一氏の研究であろう。村山修一氏の『日本陰陽道史総説』は古代から近世まで幅広く陰陽道史を見渡した労作であった。その後古代・中世・近世・特論の四冊に渡る『陰陽道叢書』が刊行された。この『陰陽道叢書』には陰陽道研究に於ける各時代の貴重な論文が収

められ、陰陽道研究の環境は大きく進歩したのである。<sup>①</sup>

この様な陰陽道研究の中で一角を成すのが、鎌倉幕府と陰陽道の関わりについての研究である。鎌倉幕府と陰陽道についての研究は一時下火を迎えた時期もあったが、近年また注目を集めている分野である。(鎌倉幕府と陰陽道の詳しい研究史は後述する)

さて、今回本稿で扱うのは陰陽道ではなく、鎌倉幕府と宿曜道の関わりについてである。宿曜道は占星術で貴族層の個人の運命を占い、必要に応じて祭祀も行なう、平安時代の中頃に成立する占術技能集団

である。

この宿曜道の研究には古くは桃裕行氏の研究があるが、やはり、より体系的なものは山下克明氏の研究であろう。山下克明氏は一連の平安時代の陰陽道をめぐる研究のなかで、この宿曜道についても言及しているのである。<sup>(3)</sup>それは、やはり宿曜道が陰陽道とほぼ同時期に成立し、お互いに競合しあいながら共に貴族社会に大きな影響を与えたものであったからであろう。

しかし、山下克明氏の主眼はあくまで陰陽道の研究であるし、またその射程も平安時代であるため、平安時代以降の宿曜道については詳しくは言及していない。

宿曜道は鎌倉時代に入り新天地鎌倉に展開し、京の貴族社会に於いても、より大きな影響力を獲得していくのである。(鎌倉時代の貴族社会と宿曜道については別稿を期す)そこで本稿では鎌倉時代の宿曜道研究の一環として、鎌倉幕府と宿曜道について、主に鎌倉で活動した宿曜師珍誉の活動を通して述べたいと思う。しかし、ここで問題になるのが、その方法論である。これまで挙げた宿曜道の研究はすべて歴史学の方法によってなされて来たものである。確かに歴史学的研究の積み重ねにより、平安時代の宿曜道の実態は、かなりはっきりしてきたが、そこには宿曜道の「現場」という視点が忘れられているのではないだろうか。宿曜道は他の宗教者達との競合や貴族達との実践の場に於いて生成し、また絶えず変質していくものでもあるのである。そんな宿曜道の「現場」を明らかにする事が宿曜道研究にも必要なのではないだろうか。<sup>(4)</sup>

こうした問題意識に依拠しながらも、今回はその前提として宿曜師珍誉が鎌倉幕府内で「幕府の宿曜師」となる過程を述べてみたい。

## 一、平安時代の宿曜道

ここでは、鎌倉幕府と宿曜道について述べる前段階として、平安時代の宿曜道の形成とその活動について概説する。

宿曜道の成立には、天徳元年(九五七)に天台僧日延により請来された符天曆が不可欠であった事は、既に桃裕行氏の研究により明らかである。<sup>(5)</sup>しかし、実際に貴族の日記中に宿曜道・宿曜師という名称が定着するのは十一世紀初期から中期にかけてである。<sup>(6)</sup>

速水侑氏によれば、宿曜道が成立する十世・十一世紀は律令体制に依存する身分秩序が崩壊し、藤原北家により摂関独占体制が形成される時期であった。この時期、天皇の外戚等の私的な血縁関係に由来する不安定な権力構造の流動や一族内外の繰り返される政争により、社会的な緊張や不安は自ずと高まりを見せていた。この様な律令的社会体制の崩壊は貴族達の意識を個人の運命へと向けていったのである。そこで、来世に救いを求める天台浄土教が広まる事になるのである。しかし一方で個人の運命を、それを司る何か宿命的なもので説明し、その宿命的なものを祈禱する事で運命を好転させようとする個人的密教修法も発達をとげるのである。<sup>(7)</sup>また、陰陽道も個人化する貴族社会で後者の役割を果たし発展していくと言えるだろう。

この浄土教と密教修法と陰陽道は、来世と現世の救済を保障しあう

関係であつた。<sup>(8)</sup>

さて、この様な社会状況の中で個人の運命を司るものとして認識された物の一つが星である。そこで、星を祭る密教修法が盛んに行なわれる様になるが、個人の運命の象徴として星を祭るには、天空の星々が個人にもたらす運命を読み取らねばならない。それには占星術が不可欠である。しかし、当時、それが行われていた陰陽道は主に国家をその対象としたものであつた。<sup>(9)</sup>そこで登場するのが宿曜道である。つまり、個人の運命と星宿をより深く結びつけたものが宿曜道であつた。この宿曜道の活動は造曆・曆日論争等であるが、最も重要な活動は貴族層への宿曜勘文の提出とそれに基づく祭祀の執行である。

宿曜勘文とは、宿曜師が実際に個人の運命を占った結果を記した文書の総称であり、生年勘文・行年勘文・日食勘文・月食勘文の四種類である。<sup>(11)</sup>これらの宿曜勘文の中でも特に重要なのが生年勘文であつた。何故ならば、貴族の子弟の誕生に際し生年勘文を製作するという事はその人物の一生の運命を宿曜師が握り、それを護持する権利を得るという事だからである。<sup>(12)</sup>平安時代の宿曜師達はこのような貴族への宿曜勘文の作成や祭祀の執行を門流内で継承していくことで、宿曜「道」という独自の「道」を形成していったのである。<sup>(13)</sup>

さて、この平安時代の宿曜道に鎌倉期への胎動が訪れるのは院政末期である。この時期に宿曜師達は宿曜勘文を活動の根本に据えつつも、宿曜道の祈祷の面を発達させて行くのである。<sup>(14)</sup>

## 二、鎌倉幕府の宗教体制と宿曜師珍誉

ここでは先ず鎌倉幕府の宗教体勢を概観し、次いで宿曜師珍誉の鎌倉下向について考えたい。

中世の国家と宗教についての代表的な研究の一つに黒田俊雄氏の「顕密体制論」がある。<sup>(15)</sup>その中で黒田俊雄氏は、権門勢家と宗教の結合を論じ、鎌倉幕府についても、宗教政策は基本的に公家の場合と同じであり、顕密体制に立脚しそれを擁護する権門の一つであつたとしている。このような黒田説に異を唱えたのが佐々木馨氏である。<sup>(16)</sup>

佐々木馨氏は鎌倉幕府の宗教政策の中心であつた鶴岡八幡宮に注目している。

鶴岡八幡宮は源頼朝がその氏子であり、一族と幕府の守護神とした社殿であり、鎌倉の社寺の頂点に立つ存在であつた。

この鶴岡八幡宮別当の補任状況を見ると、初代円曉以下十七名、すべて園城寺と東寺の出身者で占められている。佐々木馨氏はこの補任状況にこそ鎌倉幕府独自の宗教世界構築の意図がある事を指摘したのである。つまり、寺門派を幕府側に取り込む事により天台宗内の寺門派と山門派の対立を決定的とし、元々幕府と関係の深かった東寺等と共に寺門派を真言密教系信仰圏の中に宗教政策的に取り込んだのである。これにより、公家権力と天台宗主導の寺社勢力の結合した公家的体制仏教に対し得る武家的体制仏教を構築したのである。そしてそれは、幕府による宗教的祭祀権の創造であつた。佐々木馨氏は、この武家的体制仏教を公家的体制仏教である「顕密主義」に対し、密教と臨

済禪による「禪密主義」と規定している。<sup>(17)</sup> また、こうした制度面の研究とは別に、速見侑氏は実際に鎌倉で活動した台密僧の法流や資承等を明らかにし、本格的な密教修法が鎌倉に根付く過程を論じている。<sup>(18)</sup>

こうした研究から明らかな様に、鎌倉幕府の宗教世界の頂点に立つ鶴岡八幡宮の別当は密教僧であり、その宗教儀礼も密教が中心であった。

この様な研究史の上に立ちながらも、密教以外の宗教的勢力の動向として近年注目されているのが陰陽道である。

鎌倉幕府と陰陽道の関係については、木村進氏、村山修一氏がその研究に先鞭を着けたといえるであろう。木村進氏は『吾妻鏡』の陰陽道関連記事の分析から、鎌倉に於ける陰陽道の受容には時期的な段階差がある事を指摘し、陰陽道の受容背景として將軍の公家化と承久の乱による北条氏の心理状態と世相の不安を挙げている。<sup>(19)</sup> また村山修一氏は、鎌倉幕府に受容された陰陽道は京都の陰陽道をそのまま受容したのではなく、武家社会に即した形で発展したものである事を指摘した。<sup>(20)</sup> そして村山修一氏も木村進氏と同じく、陰陽道の受容背景を三代將軍源実朝の公家化志向と九条頼経の下向等にともなう公家文化浸透の一環としている。

これに對して、陰陽道受容の背景を幕府の権力構造の変化に求めたのが金澤正大氏である。<sup>(21)</sup> 金澤正大氏は、鎌倉の陰陽道は北条氏と結びつき幕府の実権が執権体制へと移行していく中で国家鎮護と審議会的機能を担う事で確立したと述べている。また同じく新川哲雄氏も、北条得宗家を中心とする幕府体制下で陰陽道が宗教政策の一端を担った

事を論じ、その祭祀も幕府の恒例行事化していく事を指摘している。<sup>(22)</sup> さらに佐々木馨氏は、持論である武家的体制仏教「禪密主義」の視座から鎌倉幕府と陰陽道について考察し、鶴岡八幡宮を中心とした密教と陰陽道が不二一体に幕府の宗教儀礼を構成していた事を指摘し、陰陽道は神祇信仰と「禪密主義」を接合させる「宗教史的接着剤」の機能を果たしていたとしている。<sup>(23)</sup> また最新のものとしては、鎌倉幕府の政治体制の中での陰陽師の位置づけの変化から組織構成員としての鎌倉陰陽師の実態を考察した赤澤春彦氏の研究がある。<sup>(24)</sup> 赤澤氏は京から下ってきた陰陽師が正式に幕府の一員として体制内に位置づけられる過程を論じ、承久元年(一二一九)の陰陽師の小侍所への配属を鎌倉幕府に於ける幕府構成員としての陰陽師の定着であるとしている。

この様な先行研究により、鎌倉幕府の中心的宗教勢力が密教と陰陽道であり、それぞれ幕府内に鶴岡を筆頭とした諸寺院や小侍所等の基盤を持ち、体制内に位置づけられていたことを確認したが、では鎌倉幕府での宿曜道の活動は、或いはその活動基盤はどのようなものだったのだろうか。

『吾妻鏡』に登場する宿曜師は主に珍誉である。<sup>(25)</sup> この珍誉は院政期から鎌倉初期にかけて、主に京都で活動した宿曜師珍賀の孫に当たる宿曜師である。<sup>(26)</sup>

珍誉の祖父珍賀は、その父珍也の代からの宿曜師であり、清水寺辺りに北斗降臨院と名付けた堂を建て、そこを活動の中心として貴族層の信仰を集めた人物である。又、九条兼実に北斗降臨院の額字を要請したことを契機に『玉葉』にも度々登場し、北斗供や熒惑星供等を行

っている。

珍賀の活動は院政期を通して北斗降臨院を拠点に続き、この堂宇は珍賀の寂した後も貴族層の信仰を集め、応永二十四年（一四一七）の焼失まで宿曜師の活動拠点として繁栄する。その焼失の様子を記した『看聞御記』応永二十四年十月二十九日条には

抑今夜清水之北斗堂焼失云々、白川院勅願寺也。

と記されているのである。ここでは珍賀の私堂であつたはずの北斗降臨院を白川院勅願寺としており、その繁栄ぶりを示していると言えるだろう。

北斗降臨院の建立により自らの門流の活動基盤を築いた珍賀であるが、彼の子には珍耀・珍喜・珍快・珍俊の四名がおり、それぞれ宿曜師であり、宿曜道の術をもつて活躍したのであるが、兼築信行氏によれば珍喜・珍快・珍俊の三名は『明月記』に僅かにその名が見える程度であり、長子珍耀に至っては元暦元年（一一八四）に三七歳で寂しており父の珍賀を越えるほどの活躍は無かつた様である。<sup>(27)</sup>

珍賀に勝るとも劣らない活躍を見せたのが珍賀の孫にあたり珍耀の一子である珍誉である。

先述した様に、祖父珍賀の活動拠点は北斗降臨院を建立した京都であつたが、その孫珍誉の主な活動拠点は京都から遥かに離れた鎌倉の地であつた。

村山修一氏によれば、珍誉が鎌倉に下るのは承久の乱の後である。<sup>(28)</sup>

宿曜師珍誉の名が初めて『吾妻鏡』に見えるのは、貞応二年（一二二二）九月十日条の天変御祈りである。珍誉は『吾妻鏡』に突然登場し、

密教僧・陰陽師と共に幕府護持の為の天変祈禱に参加しているのである。『吾妻鏡』のこの貞応二年以前の記事を見ても、宿曜道に関する記述はなく珍誉の急な拔擢は少し不自然にも思われる。

この問題について大きな手掛りと成るのが、承久元年（一二一九）の摂家將軍九条頼経の鎌倉下向に関する『愚管抄』の記事である。<sup>(29)</sup>そこには

占二モ宿曜ニモメデタク叶ヒタリトテ、ソレヲ終ニ六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。

との記述がなされている。これは、九条頼経の鎌倉下向に際して宿曜勸文が提出されたと読む事が出来るだろう。

そして、この勸文を作成した宿曜師こそが珍誉であると考えれば『吾妻鏡』への急な登場も説明がつくのではないだろうか。実際に『吾妻鏡』の九条頼経の鎌倉下向の記事を見ると、護持僧大進僧都観基・陰陽師安倍晴吉・權持医頼経等の名はあるものの、宿曜師珍誉の名は見当たらない。<sup>(30)</sup>

しかし、ここで想起されるのが珍誉の祖父珍賀の貴族社会での活動である。

珍賀の貴族社会での活動は、『玉葉』等に見える事は既に述べたが、『玉葉』承安四年（一二七四）十月二十五日条には

宿曜師珍賀法橋、清水寺辺建立一堂、「名北斗降臨院云々」額字先日切々依申請、今日写遣之。

とあり、九条兼実が北斗降臨院の額字を書いて送った事を記している。これを契機に九条兼実と珍賀の交流は盛んとなり、九条兼実は珍賀の

有力な後援者の一人となるのである。

自らの門流内に於いて貴族達への祭祀の執行権や運命の勘申権を伝承して行く事により一種の職業意識「道」の意識が形成された事を山下克明氏が指摘しているが、珍賀の門流でも九条家に於ける祭祀の執行権や運命の勘申権を継承していったものと考えられる。

この様に考えれば、九条頼経の宿曜勘文を珍誉が作成したというのも強ち荒唐無稽な推論とも言い切れないであろう。

生年勘文を製作するという事はその人物の一生を護持する権利を得るという事は先にのべたが、つまり珍誉は宿曜道に於いて九条頼経を護持する立場にあったと考えられるのである。そしてそれは九条頼経が將軍として鎌倉に下った後も変わらず、そればかりか、九条頼経が一貴族から鎌倉幕府の権力の象徴者たる將軍になる事で、珍誉は新天地鎌倉での活動の機会を得たのである。

### 三、宿曜師珍誉の鎌倉での活動

ここでは、『吾妻鏡』に載る珍誉の活動を通して鎌倉幕府に於いて宿曜道がどの様に認識されていたのか。或いは、宿曜道が幕府の祈禱にどの様な変化をもたらしたのかを考えたい。

珍誉の名が初めて『吾妻鏡』に見えるのは、貞応二年(一二二二)九月十日条である事は既に述べた。そこでもう一度、貞応二年(一二二三)九月十日条の天変御祈りの記事を確認してみると

被始天変御祈禱等。所謂。

愛染王護摩 辨僧正定豪

薬師護摩 大進僧都觀基

尊星王護摩 内大臣僧都親慶

北斗護摩 信濃法眼道禪

七曜供 助法眼珍誉

属星祭 晴賢

月曜祭 親職

歳星祭 知輔

太白星祭 忠業

天曹地府祭 泰貞

七座泰山府君祭 晴幸信賢

〔右京亮〕重宗文元

道寛〔陰陽太夫〕重宗

家秀

とあり、かなり大掛かりな祈禱である事がうかがえる。更に、前後の記事を読むと、貞応二年九月の天変は一日に太陽が三分の一程欠ける日食が起こり、続く二日には太白が歳星を犯し、三日には月が太白を犯し、四日には月が心宿の前の星を犯し、六日には火災で死者を出す等の大規模な難であった。これを見ると、かくも大掛かりな祈禱も納得である。佐々木馨氏はこの貞応二年九月十日条の祈禱の記事を挙げ、密教と陰陽道が不二一体となり本格的に幕府の祈禱を行う嚆矢として(22)いる。

ここで珍誉は辨僧正定豪を始めとした鎌倉の供僧達と九条頼経の正

式の護持僧として京都から随った大進僧都觀基らと共に七曜供の壇を担当している。九条頼經の宿曜師として鎌倉に下った珍誉であったが、この記事を見る限り、この段階では珍誉が宿曜師であると幕府に認識されていた形跡は読み取れない。

勿論、珍誉自身は自らを宿曜師であると認識していたであろうが、幕府側からすれば珍誉も九条頼經の護持僧の一人に過ぎなかったのである。

珍誉が宿曜師として『吾妻鏡』に現れるのは、貞応二年（一二二三）の天変祈祷から二年後の嘉祿元年（一二二五）二月一日条である。そこには

今日可有日蝕之由、宿曜道助法眼珍誉雖勘申之、日輪無虧云々。  
とある。

記事は珍誉が日蝕の有る旨を勘申ししたが、その予想が外れた事を伝えていいる。しかしここで重要なのは、日蝕予想の正否ではなく珍誉が日蝕を勘申したという事である。承久の乱後『吾妻鏡』には天変や星宿関係の祈祷の記事が目に見えて増加している。これは、九条頼經下向に伴う貴族社会の星宿信仰の流入や北条泰時による陰陽道の幕府宗教政策化等により、幕府要人の関心が星の動向に向いて来た為である。つまり、星の動きは個人や或いは幕府全体の運命を示すものであり、日蝕や月蝕等の天変への対処もまた幕府全体の懸案事項であったのである。<sup>(33)</sup>

この様に重要な問題である日蝕の有無について珍誉は幕府に勘申しているのである。この様な天変の勘申はこれまで主に陰陽師によって

なされていたが、天変に関する勘申は宿曜師の得意とするところでもあった。<sup>(34)</sup> また、この記事を見る限りこの時の日蝕の勘申は珍誉一人だけが行った様である。結果は外れはしたが、この勘申により珍誉は、他の護持僧や鎌倉の供僧達とは違った宿曜師としての自らの存在を幕府内に喧伝する事に成功したのではないだろうか。

珍誉の名の初出が貞応二年（一二二三）九月十日条である事は先に確認したが、この嘉祿元年（一二二五）二月一日条の記事こそ、珍誉が鎌倉の僧侶達の中で宿曜師という独自の立場を形成する記念碑的記事であると言えるだろう。

また、承久の乱後の幕府に於ける星宿関係の修法の隆盛について速水侑氏は、源実頼の帰依を受け、鶴岡北斗堂の供養等を行っている忠快により持込まれた貴族社会の北斗信仰が鎌倉に浸透し、そこに珍誉が下って来た結果としていいる。<sup>(35)</sup> 確かに北斗信仰は鎌倉での本格的密教修法の定着に大きな役割を負った忠快によりもたらされたが、鎌倉に於いて星宿信仰の指導的立場を担い、花開かせたのは星の専門家である宿曜師珍誉であつたのではないだろうか。

しかし、いくら珍誉が將軍九条頼經の宿曜師であり、星の専門家であつたとは言え、幕府の祈祷の中心に食い込むのは簡単な事では無いだろう。何故ならば、九条頼經の時代に幕府の宗教界の頂点に君臨したのは鶴岡別当定豪であり、鎌倉諸寺の供僧職であつたからである。

ここで登場するのが、九条頼經の時代に実質的に幕府の実権を握っていた時の執権北条泰時である。確かに鎌倉の宗教界のトップは定豪であつたが、祈祷等の幕府の宗教儀礼執行の決定権を有していたのは

執権を頂点とした幕府の政治機構であったのである。

この執権北条泰時と宿曜師珍誉の關係を考える上で重要な記事が『吾妻鏡』嘉禄元年(一二二五)十月十九・二十日条である。これは、將軍新御所の建設地を選定する一連の記事であるが、先ず十九日条於武州御亭。相州已下有御所御地定。小路「宇津宮辻子。」東西間何方可被用哉之事。人々意見區々。爰地相人金淨法師申云。右大將家法華堂下御所地。四神相応最上地也。何可被引・移他所哉。然者被御所西方地被廣。可有御造作也者。兩國司直令問答給。依之弥御不審出来之間。未治定御占可被行云云。

とあり、続く二十日条には

相州。武州等令參會給。御所地事。重有御沙汰。可決卜筮之由云々。仍被召国道朝臣以下七人陰陽師。以法華堂下地為初一。以若宮大路。為第二。而兩所之間。可被用何地哉之由。可占申之旨。被仰含之處。国道朝臣申云。可被引・移御所於他方之由。當道勘申畢。然於一二御占者。若可付第一之趣。有占文者。申狀既似有兩様歟。之御占云々。難及一二之御占云云。珍誉法眼申云。法華堂前御地。不可然之處也。西方有岳。其上安右幕下。其親墓高而居其下。子孫無之之由見本文。幕下御子孫不御坐。忽令符合歟。若若宮大路者。可謂四神相応勝地也。西者大道南行。東有河。北有鶴岳。南湛海水。可准沼地云々。依之此地可被用之旨。治定畢。但東西之事者。被聞・食御占。西方最可為吉之由。面々申之。信賢一人不同・申之。東西共不吉也云云。

と記されている。要約すると、嘉禄元年(一二二五)十月十九日に新

御所の建設地を選ぶ評定が行われた。その折に地相人金淨法師なる人物が、右大將家(源頼朝亭)法華堂下が四神相応の地に当たり最適である事を進言した。そこで議論を尽くしたが、意見の一致を見ず、占により決する事になったのである。そして翌二十日に、安倍国道以下七人の陰陽師に卜占の沙汰が下された。しかし、安倍国道は御所移転の事は既に陰陽道が若宮大路を勘申ししているとして卜占を拒否したのである。そこで珍誉が意見を求められ、若宮大路こそ四神相応の地であると進言し、結局この進言が決めとなり新御所の建設地は、若宮大路に決まったのである。

ここで注目したいのは、執権泰時以下幕府の重職が集まつての評定に珍誉が参加している点と、珍誉の進言により事が決した点である。つまり、珍誉は幕府の評定に参加できる立場にあり、その進言は陰陽道の卜占と同等の影響力を有していたのである。

北条泰時が陰陽道の占いや祈祷を積極的に幕府の宗教政策に取り込み、また自らもその禁忌を非常に恐れた事を新川哲雄氏が指摘している。<sup>(36)</sup>この様な泰時だからこそ、京から下ってきた新しい宗教的職能者である宿曜師珍誉を取り込み、宿曜道を幕府の宗教政策に利用しようとしたのではないだろうか。また、この泰時は執権となる以前には初代六波羅探題北方として京に暮らした経験があった。奇しくも六波羅は、珍賀が建立し、以降珍流宿曜師達の拠点の一つとなった北斗降臨院のあった清水とも近く、当然珍流宿曜師の存在も知っていたと考えられるのである。

この一連の御所移転の手続きは、鎌倉を軍事都市から政治・商業都



市へと変化させる意図があったが、それ以上に源氏政権の象徴である大倉御所から離れる事で、源氏・北条政子の時代が終わり、執権北条泰時の時代の幕開けを意味していたのである。<sup>(37)</sup>

ここからは全く推測の域を出ないが、旧勢力から逃れ自らの政権を確立したい北条泰時と鎌倉に宿曜師としての活動の基盤を築きたい珍誉。二人の利害は見事に一致しているのである。

因みに、珍誉はこの翌年、嘉禄二年（一二二六）に宿曜の勞により、法眼から法印に進んでいるが、これは鎌倉幕府の後ろ盾が有つての叙位であつたと考えられる。この嘉禄二年（一二二六）は九条頼経が正式に將軍に補任された年であるが、それでも九条頼経はまだ幼く、京での事跡も無く、鎌倉での事跡もまだそう多くはない珍誉の叙位には、北条泰時の力が背後にあつたのではないだろうか。

嘉禄元年（一二二五）の新御所建設地の評定により、珍誉は執権北条泰時という鎌倉での後ろ盾を得たのではないだろうか。

さてこの様な視点で、貞応二年（一二二三）九月十日条以降の幕府の天変祈禱の記事を見ると、実にその多くに珍誉の名が見出せる。幾つか例を挙げると、貞応三年（一二二四）十月一六日条。この時もかなり大掛かりな祈禱が行われており、珍誉は七曜供を奉仕している。続いて嘉禄二年（一二二六）八月七日条では珍誉と珍瑜が祈禱に参加している。それぞれ珍誉は土曜星供を担当し、珍瑜に至っては木曜星供・木曜供・土曜供の三壇を担当している。この祈禱も大掛かりな祈禱であつた。尚、村山修一氏はここで木曜星供・木曜供・土曜供を修している珍瑜は『尊卑分脈』に載る珍賀の四男である珍俊の息子珍瑜

の事であるとしている。<sup>(39)</sup> おそらく珍誉に同行して共に鎌倉に下つたものと考えられる。

もちろん幕府の天変祈禱に於いてその全てに珍誉が参加している訳ではないが、実に十四もの天変祈禱に参加している。これは、他の鎌倉僧と比べるとかなり多く、初出の貞応二年（一二二三）と、その翌年元仁元年（一二二四）の祈禱参加は除くとしても、嘉禄元年（一二二五）の日蝕勘申以降の天変祈禱には、他の鎌倉僧には無い宿曜師としての能力を幕府に期待されて参加していると考えの方が自然である。しかし、ここで注意したいのは、珍誉が元々いた京の貴族社会と鎌倉幕府とでは宿曜師に対して期待するものが異なる事である。貴族達が宿曜師に期待したのは、先ず宿曜勘文により未来を予知する事であり、次にその降りかかるであろう災いを星の祭祀により取り除く事であつた。しかし、鎌倉での珍誉の活動からは、あまり宿曜勘文が重視されている様子は読み取れない。鎌倉で必要とされたのは、未来予知よりも星の災いを取り除く祭祀を行う能力であつた。

ともあれ、珍誉は幕府の天変祈禱に於ける核の一つとして地位を獲得していたと言えるのではないだろうか。

#### 四、鎌倉幕府の宿曜師へ

次に鎌倉での珍誉の事跡で注目したいのは、『吾妻鏡』安貞元年（一二二七）十一月二十四日条の記事である。そこには、

御不例殊御辛心。仍重而有御祈等。伊豆。箱根。三島。各可有奉

幣。以大和右衛門尉久良。遠藤左近將監為俊為御使。被奉御劍等。共以今曉令進發。明日參着之様。可揚鞭之由。含御旨云云。又秘法等被修之。先五壇法。

中壇不動明王 弁僧正

降三世明王 大進僧都

軍荼利夜叉明王 信濃法印

金剛夜叉明王 加賀律師

炎魔天供 宰相律師

北斗供 珍譽

当年星供 珍瑜

入夜始行属星祭。親職奉仕之。

とあり、將軍九条頼經の病氣平癒の祈禱に参加している事がわかる。この時の不例の祈禱は、前後に伊勢内宮外宮以下の社に於いて神樂が奉納され、数種の陰陽道祭祀が行われ、修法も大掛かりな大法五壇法が行われ病状の深刻さがうかがえる。この祈禱は、將軍個人を対象とした病氣平癒の祈禱ではあったが、幕府にとっては重要な政治課題への対応であり幕府護持の祈禱であった。この様な重要な祈禱に珍譽が参加している事は、やはり幕府体制内に於いて珍譽が、重要な位置を占めていた証左となるだろう。

ここで珍譽が修している北斗供は北斗七星の内、個人の生年干支で決まる一生の運命を掌る本命星を供養する修法であり、珍瑜の当年星供は七曜の内、個人の今年一年の運命を左右する曜を供養する修法である。この二つの修法は共に個人をその対象としており、幕府護持の

祈禱とはいえ珍譽が九条頼經の宿曜師である事を良く示している。

これまで鎌倉での祈禱に於ける宿曜師の役割は主に天変消除であり、病氣の祈禱には、神祇への祈りと密教修法と陰陽道祭祀が行われるのみで宿曜道祭祀は行われなかった。しかしここに於いて、天変祈禱以外にも宿曜師の祈禱が行われる様になったことは、幕府内の珍譽の地位上昇を示すものとして注目すべきであろう。

尚、この祈禱の直後の安貞元年（一二二七）十二月十三日に、幕府は護持僧・陰陽師を結番し祈禱の制度化を図っているが、ここに珍譽は含まれていない。しかしだからと言って、幕府内での珍譽の立場が低下したという訳ではない。この後も珍譽は、宿曜道の祈禱や占いで將軍と幕府の護持に力を尽くし、幕府内で宿曜師としての地位を確かなものにして行くのである。

例えば、貞永元年（一二三三）十月二十二日条には

為將軍家御願。明年可被立五大尊堂事。未被議・定其地。仰人々被求勝地。毛利藏人大夫入道西阿領大倉奥地可然之由。有其沙汰。

今日。依仰相州。武州相・具親職。晴賢。文元。珍譽。金藏等。

監臨給。（中略）仍可為此地之由。被思食云云。

とあり、將軍家の五大尊堂の建立地を選ぶ際に、執権北条泰時・連署北条時房に陰陽師達と共に同行し、地定を行っている様子が記されている。珍譽は宿曜師としての星に関する能力以外にも地を見る能力も高く評価されていたようである。

また、嘉禎二年（一二三六）四月八日条には、

將軍家依可有渡・御于伊豆国小名温泉。以来十七日。被定御進發

日。而去一日若宮蟻恠異哀。動揺不安之由。占申之上。又宿曜師珍譽法印可有御・慎遠行之旨言上。陰陽師不快之由占申。仍今日有議定。遂思食止云々。

とあり、珍譽の遠行慎むべしとの勘申をうけて陰陽道の占いが行われ結局、九条頼経の小名温泉行きが中止されたのである。この珍譽の勘申はおそらく、宿曜勘文の一種である行年勘文に基づく指摘であろう。この勘申により陰陽道の占いが行われ、將軍の渡御が中止に至った事は、この頃には珍譽は幕府の中に宿曜師としての確固たる地位を得ていた事を示しているだろう。

さらに珍譽の事跡ではないが、珍譽により鎌倉に扶植された宿曜道が幕府の中に於いて密教・陰陽道と並ぶものとして根をはっていたことを示す記事が嘉禎元年（一二三五）六月二十八日条の記事である。そこには、

今夜。於新造精舎。被行解謝祭等。大鎮。〔親職朝臣。〕大土公。〔晴賢朝臣。〕大將軍。〔文元朝臣。〕王相。〔廣相朝臣。〕又供養之間。

為避魔障。被行南方高山祭。於名越山上。弁法印良算奉仕之。

とある。將軍家五大尊堂の解謝の陰陽道祭祀が行われる間、良算なる人物が名越山に於いて陰陽道祭祀の場を結界する為に南方高山祭を奉仕しているのである。（この良算については別稿を期すが、主に京で活動した宿曜師である）

良算が『吾妻鏡』に登場するのは寛喜二年（一二三〇）十一月二十二日条と、今回の記事の計二回である。寛喜二年（一二三〇）十一月二十二日条では、天変御祈りとして珍譽の大属星供と共に東方清流祭

を行っている。

ともあれ、この嘉禎元年（一二三五）六月二十八日条では陰陽道と宿曜道が共同で一つの儀礼空間を構築しているといえるだろう。ここでは、一見宿曜道祭祀は陰陽道祭祀の補助にまわっている様に見えるが、ここに於いて宿曜道祭祀は陰陽道祭祀を行う場をも包み込む結界の役目を果たしているのであり、宿曜道祭祀がなければ陰陽道祭祀も成り立たないのである。まさに相互補完的に一つの儀礼を成立させていると言えるだろう。

この他にも珍譽は多くの幕府の祈祷に携わっているが、宿曜師珍譽にとって本領発揮であり、また幕府の宿曜師としての地位をさらに強固にする契機となる出来事が『吾妻鏡』延応元年（一二三九）十一月二十一日条に記されている。記事を引くと

辰刻御平産也。（中略）雜事勘文。維範朝臣一人献之。載已刻誕生之由。助法印珍譽申云。辰終尅也。有時刻相違者。宿曜方勘文可相違云々。仍書改之載辰字云々。

とある。九条頼経の息子將軍若宮（九条頼嗣）の誕生に際し、陰陽師安倍維範が已刻誕生を勘申したのに対し、珍譽は宿曜方勘文を根拠に辰刻を主張しこれが受け入れられたのである。

この安倍維範は「維範朝臣一人献之」とあるように、鎌倉の陰陽師中ただ一人勘文の提出を命じられている事からも九条頼経の信頼厚かつた人物であると考えられる。

ここでその安倍維範の勘申が退けられ珍譽の意見が受け容れられた事は、誕生時刻に関しては幕府にとって宿曜師珍譽の勘申が陰陽道の

勘申より信任があつた事を示している。

ここで珍誉が根拠とする「宿曜方勘文」とはまぎれもなく宿曜勘文、特に生年勘文の事であり、摂家將軍二代に渡つての生年勘文を珍誉が作成したことを示している。

珍誉がかつて九条頼經の生年勘文を作成した可能性が高い事は先述したが、それはあくまで九条頼經が將軍となる以前の事であつた。しかし、今回勘文を作成した九条頼嗣は將軍になるべく生まれたのであり、その誕生時から幕府という制度の一員であつたのである。ここで珍誉の宿曜勘文作成が公の記録である『吾妻鏡』に登場するという事は、珍誉による宿曜勘文作成もまた鎌倉幕府内に於いて制度化されたという事であろう。

そして、この翌年の仁治元年（一二四〇）四月十日に珍誉は將軍若宮（九条頼嗣）の御祈衆の一人に補任されるのである。ここに於いて珍誉は九条頼經の宿曜師から「鎌倉幕府の宿曜師」となつたのである。

この仁治元年（一二四〇）の人事をきっかけに、幕府内に於ける珍誉の立場は一層確かなものになつたのは確実である。例えば、『吾妻鏡』仁治二年（一二四二）二月四日条には、

白赤氣三條出現。（中略）泰貞朝臣最前馳・参御所。申云。此變為彗形。異名火柱也。村上御宇康保年中出現。同變云々。于時前武州令候御前給。佐渡前司基綱。秋田城介義景。太宰少貳為佐。法印珍誉等祇候。

とある。この日出現した白赤氣について、安倍泰貞が御所に参じて北

条泰時に意見を述べている間、珍誉は佐渡前司基綱（後藤基綱）・秋田城介義景（安達義景）・太宰少貳為佐等と共に泰時の傍に祇候している。ここで珍誉と共に祇候している佐渡前司基綱・秋田城介義景は、共に評定衆の一員で幕政の中樞を担つた御家人であり、太宰少貳為佐も室町まで続く九州の名門出身の御家人である。珍誉は、この様な幕府の有力御家人達と同列に泰時の傍に祇候しているのである。ここに於いて珍誉の幕府の宿曜師としての地位は揺るぎないものになつていたと考えられるのである。

この後も、珍誉の幕府での宿曜師としての活動は続き、珍誉による祈祷の奉仕は大納言家（九条頼經）御祈・若君御前御祈として半ば恒例化して行なわれる様になつて行くのである。

### おわりに

以上、鎌倉幕府に於ける珍誉の活動を見てきたが、九条頼經の宿曜師であつた珍誉にとつて大きな転機は九条頼經が鎌倉將軍となつた事であつた。この事により、珍誉は九条頼經（三寅）に随い鎌倉へ下り、鎌倉で宿曜師として活動する機会を得たのである。

珍誉にとつて二つ目の転機となつたのは、執権北条泰時の後ろ盾を得た事である。恐らく、泰時の力があつたればこそ、珍誉は鎌倉僧達の中で宿曜師として独自の活動が展開できたものと思われるのである。しかし、やはり珍誉が「鎌倉幕府の宿曜師」となつたのは宿曜師としての珍誉の能力が突出していたからであろう。摂家將軍九条頼經

の時代に鎌倉に星宿信仰が盛んになるが、この鎌倉での星宿信仰の隆盛は宿曜師珍誉の下向よるところが大きいのではないだろうか。

この後の珍誉の事跡で『吾妻鏡』に確認出来るのは、寛喜四年（一二四六）の五月十四日条の天変祈祷までである。この珍誉の後は『吾妻鏡』に宿曜師の名は殆ど見出せなくなる。これは、密教僧に於ける鶴岡八幡宮や、陰陽師に於ける小侍所の様に幕府機関内にその独立した所属機関がなかった為と思われる。幕府から見れば、代々宿曜道を幕府内に制度化しようと言う意図はなく、たまたま下ってきた護持僧の一人が宿曜師であったと言うことであろう。しかし、珍誉にとつてみれば、紛れも無く自らは「鎌倉幕府の宿曜師」であつたであろう。

永正十五年（一五一八）に儒者の東坊城和長の手に成つた『諸祭文故実抄』<sup>(40)</sup>の冒頭に次の様にある。

祭文有諸法「今先挙十六個条」法有三家云々者、一内典、二外典、三宿曜師也、

これは祈祷と言へば、仏教（密教）・陰陽道・宿曜師の三種類であるということである。

珍誉の活動期間は僅か二十年程であつたが、その間の珍誉の活躍は右の一文の言う意味の一端を示していると言えるだろう。

## 〔注〕

- (1) 齊藤勛『王朝時代の陰陽道』（甲寅叢書第六編、甲寅叢書刊行所、一九一五年。村山修一『日本陰陽道史総説』（塙書房、一九八一年）は通時

代的に古代から近世までの陰陽道を扱つたものである。『陰陽道叢書』古代・中世・近世・特論編（名著出版、一九九一―一九九三）には各時代毎の論文が収録されている。また、特論編には脊古真哉編「陰陽道関係文献目録」が収録され、一九九二年までの陰陽道関係論文が詳しく記載されている。

- (2) 桃裕行『暦法の研究』（下）桃弘行著作集8、思文閣出版、一九九〇年  
(3) 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年

- (4) この様な立場に立つ先行研究としては、儀礼や祭文或いは次第書等の宗教者達の実践行為から中世の信仰世界を探つた山本ひろ子氏の研究（山本ひろ子『変成譜』春秋社、一九九三年）や、いざなぎ流太夫の実践の場から祭文といざなぎ流祈祷に於ける祭文の役割を考察した斎藤英喜氏の研究（斎藤英喜『いざなぎ流祭文と儀礼』法蔵館、二〇〇二年）等がある。また（斎藤英喜『安倍晴明』ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇〇四年）も重要な先行研究の一つである。

- (5) 前掲（2）  
(6) 前掲（3）  
(7) 速水侑『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館、一九七五年  
(8) 平雅行『日本中世の社会と仏教』塙書房、一九九二年  
(9) 前掲（3）  
(10) 前掲（2）。前掲（3）  
(11) 前掲（3）また同書には「宿曜勘文集」が収められている。  
(12) 藤原伊周が藤原道長を呪詛したとされた事件に於いて、連座して流された宿曜師利源の役割が宿曜道の占術によって道長の運命を占う事であったのに象徴的である。藤本孝一「藤原伊周呪詛事件について」『風俗』十九号、一九八〇年  
(13) 前掲（3）

- (14) 拙稿「宿曜道の院政期―珍賀と慶算を中心に―」『佛教大学大学院紀要』三四号、二〇〇六年
- (15) 黒田俊雄『顕密体制論』黒田俊雄著作集第二巻、法蔵館、一九九四年
- (16) 佐々木馨『中世仏教と鎌倉幕府』吉川弘文館、一九九七年
- (17) この佐々木説については平雅行氏による批判がある。平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」『大阪大学大学院文学研究科紀要』四十巻、二〇〇〇年。年。同「鎌倉幕府と延暦寺」中尾堯編『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館、二〇〇二年等
- (18) 速水侑「鎌倉政権と台密修法」『中世日本の諸相』下巻、吉川弘文館、一九八八年
- (19) 木村進「鎌倉時代の陰陽道の一考察」『陰陽道叢書』中世、名著出版、二〇〇〇年
- (20) 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年
- (21) 金澤正大「関東天文・陰陽道に関する一考察」『陰陽道叢書』中世、名著出版、二〇〇〇年
- (22) 新川哲雄「鎌倉と京の陰陽道」『季刊日本思想史』五八、二〇〇一年
- (23) 佐々木馨「鎌倉幕府と陰陽道」佐伯有清編『日本古代中世の政治と宗教』吉川弘文館、二〇〇二年
- (24) 赤澤春彦「陰陽師と鎌倉幕府」『日本歴史』四九六、二〇〇三年
- (25) 珍賀についての主な先行研究には前掲(20)。兼筑紫信行「珍賀とその世系」『国文学研究』一二九、一九九九年
- (26) 珍賀の活動については前掲(3)。前掲(14)

- (27) 珍譽の出自や法脈については前掲 (25) 兼築論文に詳しい。

『尊卑分脈』『桓武平氏』

家能——珍也

珍耀——珍誉

珍喜  
珍觀

女子（七条院兵衛佐）

「女子（源通氏室・具氏母）」

——珍快——珍覺

珍俊  
珍兼

「珍愔」

- (28) 前掲 (20)
- (29) 『愚管抄』 卷六
- (30) 『吾妻鏡』 承久元年 (一一一九) 七月十九日条
- (31) 前掲 (3)
- (32) 前掲 (23)
- (33) 前掲 (18) 前傾 (22)
- (34) 前掲 (3)
- (35) 前掲 (18)
- (36) 前傾 (22)
- (37) 松尾剛次『中世の都市と非人』法藏館、一九九八年
- (38) 前掲 (25)
- (39) 前掲 (20)
- (40) 『諸祭文故実抄』の成立事情や内容についての研究には、伊藤慎吾「東坊城和長の文筆活動」『国語と国文』第八二巻第六号、二〇〇五年。同「室町後期紀伝儒の祭文故実について―東坊城和長を中心に―」『国語国文』第七二号第八巻、二〇〇六年がある。また『諸祭文故実抄』の伝存

状況については、山下克明「陰陽道関係史料の伝存状況」『東洋研究』  
第百六十号、二〇〇六年がある。

〔一次資料〕

『吾妻鏡』（新訂増補国史大系）

『玉葉』（国書刊行会）

『看聞御記』（統郡書類従補遺2）

『尊卑分脈』（新訂増補国史大系）

『明月記』（国文名著刊行会）

（とだ ゆうすけ）

文学研究科仏教文化専攻博士後期課程）

（指導…斎藤 英喜 教授）

二〇〇六年十月十九日受理

